

北支重機関銃隊

福岡県 河野 菊一

私は大正十四（一九二五）年二月十五日、福岡県みやま市瀬高町の農家に生まれました。

昭和十三（一九三八）年に浜田尋常高等小学校を卒業して、大牟田にあった九州高等簿記学校に入学、昭和十四年に卒業して瀬高町青年学校に通っておりました。

当時、昭和十九年には二十歳と十九歳との両年の兵隊検査が同時に行われ、私は十九歳で甲種合格となりました。当時としては極めてめでたいことで、家族も喜んでいました。

そして昭和十九年九月十五日、入営となりましたが、部隊は久留米の第四十八師団の貨物倉庫でした。そこで一週間で出発となり、夜の間に久留米から汽車で門司港まで行き、門司港から釜山港へと向かいました。

この船旅は揺れに揺れ、皆が玄界灘の荒波の猛烈な揺れを体験し、苦しかったことを思い出しま

す。
釜山に上陸すると、ここからは汽車に乗り込み、今度は汽車に揺られ、幾日も掛かって到着した所が北支の山西省の陽泉というところでした。そこには北支派遣「固」第一九七五部隊が駐屯しており、第二中隊光増隊に入隊しました。

現地で一期の検閲までの三カ月間、軽機関銃の教育を受け、その後、昔陽で一カ月間、今度は重機関銃の集合教育を受けました。

ここで中隊の編成が行われ、私は汽車で北京を通り大原で馬を受け取り、運城へと行きました。そこは北支派遣軍の「忠烈」部隊の本部となっていました。さらに三十キロぐらい離れた黄河の上流で黄河のそばの東延村という部落がありました。ここには重砲隊の重機関銃と迫撃砲の松村中隊が駐屯しており、私は重機関銃の射手となりました。

河南作戦は、昭和十九年春ごろから始まり、五月二十五日の洛陽総攻撃までは、関東軍の一部の機動歩兵部隊や機甲部隊の進撃、進行振りには物凄いいものでした。

また敵将、湯温伯の軍隊も強力で、日本軍も苦戦したと話にも聞いていました。我々は、その後の治安維持が任務でありましたが、討伐や幾多の戦闘で敵と砲火を交えることも幾度かあり、部隊の最先端での苦労を味わいました。戦死者も出ましたし、場所は記憶していませんが、各所に地雷が敷設してあり、行軍には気を付けないと、いつ地雷で死ぬかも分からない恐怖がありました。

特に夜行軍では、前の者の姿を見ながら、気をつけてゆくのですが、余りにも地雷が多く、手探りで心配しながらの行軍でした。

しかし多くの他の戦場では、食料が不足して、困った話を聞きましたが、私たちは食料だけは大丈夫でした。これが唯一の良かったことです。ただ水には困り、生水を飲むと、下痢をしてでも伝

染病にならなかったのを助かりました。

ある戦闘で、我が分隊は十二人でしたが、その中、中沢伍長、江下上等兵、そして下川健一君の三人が戦死しました。

私は二番砲手、弾薬手、四番、五番砲手も交代で勤務し、苦労の連続でした。

昭和二十年春ごろより夏の終戦間際まで、大きな戦闘が続きました。野営もあり、山肌に掘られた穴蔵での生活もありました。当時、住民も穴蔵生活をしていましたが、戦後六十余年たっても住民はまだ穴蔵生活をしているそうです。同年兵の山田一等兵は即死でしたが、どの戦場であったか記憶していません。

北支といっても広いので、地名までは覚えていません。北支でも一番奥地のようでしたが、そこで終戦の報告を聞きました。それから歩いて三カ月くらい掛かって天津の貨物倉庫に着き、復員船を待っていました。

その間、武器は持っていましたので心強く思い

ましたが、復員する昭和二十一年八月、その前日になって武器を提出しました。丸腰で、その後はどうしたらいいか、どうなるのかと心配しました。

引き揚げは天津よりタガクの港に行き、そこから輸送船に乗り、やっと日本へ帰えれると思うと、もう戦友たちと懐かしい日本に帰ったような気がして、子供のように喜び合いました。

船は出港して、懐かしい故国に帰りました。着いたところは山口県仙崎の港でした。直ちに上陸しました。既に思いは故郷へ飛び、家族は健在だろうか、父母は元気であるだろうか、次々に我が家のことが思い浮かんできました。

帰路、福岡から西鉄電車に乗り、江の浦駅から徒歩で約一キロ、途中親戚の家により帰国の挨拶をしました。ここは祖母の里でしたが、皆元気で、大変喜んでくれました。それから我が家に帰りますと、父母や祖父母、妹など皆元気で迎えてくれました。

しばらく休養して、家業の農業を手伝っていま

した。昭和二十五年ごろ、復員後初めての戦友会が柳川市内であり、百人ほどが集まりました。その後も戦友会では戦場での苦勞、苦難、戦死した戦友の話で、尽きることがありません。